

# 第1章 2017年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉井秀夫 千葉 豊 内記 理

## 1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2017年度には、以下のように発掘調査1件、試掘調査3件、立合調査5件、資料整理1件をおこなった（括弧内は図版1および表2の地点番号）。

- |      |                                       |                 |
|------|---------------------------------------|-----------------|
| 発掘調査 | 京都大学関田学生寄宿舍（混住寮）新営（田中関田町遺跡B B18区）     | （整理中，図版1 - 455） |
| 試掘調査 | 京都大学関田学生寄宿舍（混住寮）新営（田中関田町遺跡B B18区）     | （第1章，図版1 - 454） |
|      | 京都大学外国人宿舍（百万遍）新営（西部構内A Z20区）          | （第1章，図版1 - 456） |
|      | 京都大学外国人宿舍（東山二条）新営（岡崎遺跡Z S23区）         | （第1章，図版1 - 457） |
| 立合調査 | 京都大学（北部ほか）基幹・環境整備工事（北部構内B G36区ほか）     | （第1章，図版1 - 458） |
|      | 京都大学総合研究15号館（旧建築学教室本館）改修（本部構内A Y29区）  | （第1章，図版1 - 459） |
|      | 京都大学（医学部・薬学部）基幹・環境整備工事（病院東構内A K16区ほか） | （第1章，図版1 - 460） |
|      | 京都大学雨水排水改修（本部構内A X25区）                | （第1章，図版1 - 461） |
|      | 京都大学有機廃液処理装置撤去その他工事（本部構内A Y25区）       | （第1章，図版1 - 462） |
| 資料整理 | 京都大学熊野職員宿舍改築（熊野構内Z Z18区）              | （第2章，図版1 - 435） |

## 2 調査の成果

以上のうち2017年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、熊野構内Z Z18区については、第2章で成果を詳述しているので参照されたい。

**熊野構内Z Z18区の発掘調査** 本調査区は熊野構内の東部に位置する。発掘調査の結果、中世の溝や土坑などの遺構や、近世の井戸や野壺、幕末のものと考えられる大溝や瓦積みなどの遺構が見つかった。遺構に対応して、中世から幕末にかけての土器や瓦を中心とする遺

物が出土したほか、下層の砂礫層からは縄文土器が、中世の遺構や包含層からは平安時代後期から中世にかけての瓦がまとまった数で出土した。その中には平安時代後期のものと考えられる鬼瓦も含まれる。これらは、本調査区の周辺に存在したと考えられる白河北殿や栗田宮にかかわる遺物と考えられよう。

また、幕末期頃のものと考えられる大溝や瓦積みについては、絵図の記録などから同地に存在したと想定される阿波徳島藩邸に関係するものと推察される。出土遺物から比定を裏付けることはできなかったものの、今後周辺の調査が進めば、調査区周辺における幕末期の様相が明らかになる可能性が高い。

**京都大学構内における試掘調査** 本年度は、以下の3件の試掘調査を実施した。

〔関田学生寄宿舎新営（図版1-454）〕 同地点は遺跡指定範囲外であったが、今出川通をはさんで南側の西部構内においてこれまでに中世の遺跡がみつまっていることを考えると、その広がり同地点にまで及ぶ可能性は十分に考えられた。そこで、京都市文化財保護課の担当者立ち合いのもと、5月15日に2箇所を試掘をおこない、中世遺物包含層の良好な残存を確認した。結果、同地点は田中関田町遺跡として新たに登録され、その後発掘調査を実施した。現在、その成果を整理している（図版1-455）。

〔外国人宿舎（百万遍）新営（図版1-456）〕 左京区吉田泉殿町に所在する旧・警察寮敷地に、外国人向けの宿舎の新営が計画された。新営予定地は吉田泉殿町遺跡に含まれるため、遺物包含層と遺構の有無や深さなどを確認する目的で、7月18日と9月29日の2回に分けて試掘をおこなった。計6箇所で掘削をおこなったが、いずれの地点においても地表下1.3m以下まで石炭ガラやコークス灰、コンクリート塊などが埋まっており、遺跡の残存を確認することができなかった。1931年に警察寮の建物が建てられる以前には、この地点は京都高等工芸学校の敷地であり、この時代に大規模な土地変化がおこなわれたものとみられる。遺跡の大半はすでに失われていると判断した。

〔外国人宿舎（岡崎）新営（図版1-457）〕 左京区岡崎成勝寺町に所在する旧公務員宿舎跡地が京都大学敷地となり、外国人宿舎の新営が計画された。予定地は白河街区跡（延勝寺跡）・岡崎遺跡に含まれるため、遺物包含層と遺構の遺存状況を確認する目的で、7月19日に試掘調査をおこなった。その結果、古代にさかのぼる遺物包含層が良好な状態で確認され、宿舎新営に先立ち、発掘調査を実施することが決まった。

**京都大学構内における立合調査** 以上の発掘調査や試掘調査以外にも、本年度は5件の立合調査をおこなった。北部構内B G36区ほかでおこなった立合調査では、北部構内各

## 北部構内B G36区ほかの立合調査

地点における包含層の堆積状況を確認したため、それらを次節で示す。

それ以外にも、5月23日から6月1日まで断続的におこなった本部構内A Y29区における立合調査でも興味深い結果を得た（図版1-459）。基本的な層序としては、表土の下に茶褐色土、そしてそのさらに下に黒褐色土の層が続く。5月29日におこなった南寄りの区画では、古代以前の包含層である可能性のある黒褐色土の上面で、幅2m前後で、やや東に振れる南北方向の流路を確認した。なお、流路は砂礫で埋められていた。

### 3 北部構内B G36区ほかの立合調査

5月9日から6月6日にかけて、複数の地点において断続的な立合調査を実施した（図版1-458）。それぞれの地点については、アルファベットで指示する（図1）。なお、この調査は昨年度報告の〔伊藤・富井2018〕と一連の工事によるもので、調査地点も連続している。成果を合わせて参照されたい。

A地点では西壁で、地下0.5mで灰褐色土を、0.7mで炭混じりの茶褐色土を、0.8mで礫混じりの褐色砂質土を、1.0mで黄砂の土層を確認した。黄砂は礫混じりで精良さがなく、色も暗い。流路の可能性がある。

B地点では西壁で、地下0.6mで灰褐色土（暗褐色と灰褐色土でさらに2層に細分できる可能性がある）を、0.9mで暗茶褐色土を、1.0mで褐色砂質土を、1.2mで黄砂の土層を確認した。褐色砂質土からは土師器を採集しており、中世の包含層と考えられる。黄砂はA地点同様、礫混じりで精良でない。

C地点の西壁では、地下1.0mで黒灰色砂質土層を確認した。時期は不明である。

D地点の西壁では、地下0.7mで暗灰色砂質土を、0.9mで黒灰色砂質土を、1.1mで黄砂を確認した。暗灰色砂質土と黒灰色砂質土はいずれも粗砂質である。B E29区の発掘調査時の所見によれば、前者は室町時代、後者は平安時代の包含層の可能性ある〔岡田・吉野1979 p.18〕。なお、西壁の南寄り、表土のコンクリート直下で野壺と思われる遺構の断面を認めた。

E地点の東壁では、地下0.4mで灰褐色土を、0.5mで褐色砂質土を、0.7mで黄砂を確認した。また、黄砂を切る黒灰色砂質土の落ち込みを確認した。褐色砂質土と黒灰色砂質土からは遺物が出土していないが、前者は中世の包含層、後者は弥生から古代にかけての包含層と推定される。なお、これらの包含層は、北へ行くほどシルト質から粘質に変わる。

F地点では南壁で、地下0.3mで粘質の灰褐色土を、0.5mで粗砂質茶褐色土を、0.7mで

黄色粗砂の土層を確認した。茶褐色土からは中世の土師器が出土した。茶褐色土下端の一部では黒褐色土がある。

G地点では南壁で、地下0.3mで灰褐色土を、0.4mで茶褐色粗砂質土を、0.5mで茶褐色粗砂質土を、0.6mで黄色粗砂を確認した。

F地点とG地点の土層の観察から、東へ向かう程、黄砂が粗くなり小礫が混じること、そして、レベルがあがることわかる。

H地点の東壁では、地下0.4mで灰褐色土を、0.6mで茶褐色土を、0.8mで黒色粘質土を確認した。茶褐色土の下半分には鉄分が集積し、そこから土師器の細片が出土した。黒色粘質土からは遺物を確認しなかったが、古代以前と推定される。

H地点の北壁では、地下0.8mで褐色土が黒色粘質土を切って西に向かって落ち込む状況を確認した。褐色土は土師器の細片を含む。褐色土の溝か段差と考えられる。

以上に示したように、各地点での一連の立合調査により、北部構内における遺物包含層の詳細な堆積状況を把握することができた。

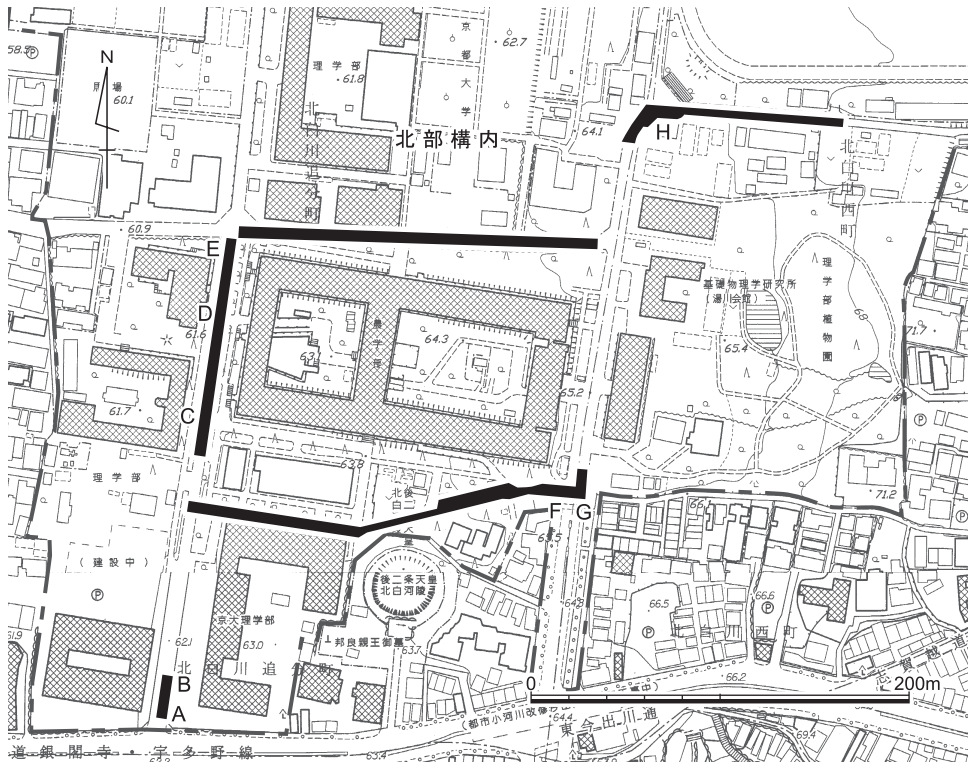


図1 調査地点の位置 (1/4000)